

ブタ・グッズに囲まれて

コンサルタント Info Box 津田謙二

愛されるブタ、身近なブタ・家の中のブタさん、ブタ・グッズ、となると、われわれは何を思い浮かべるであろうか。

まず家の中を見回す、最初に出てくるのは蚊遣、つまり蚊取り線香をくゆらすブタさんの姿をした陶器かもしれない。あのユーモラスな姿、しかしこれは素焼きのままだから野趣があってよい。大きな鼻が煙の通路、夏の風物詩と申し上げたいが、最近は電熱式のマットで薬剤を気化させるタイプが出現して、出番が減っているのはいささかさびしい。

これが欧米になるとわれわれ以上に食生活に密着していたせいか、とたんにブタ・グッズは多くなる。なかでも最も親しまれて一般的なのはブタさんの貯金箱であろう。これが農家以外の子どもが初めて出会うブタさんと言えるかもしれない。このブタさんの貯金箱、またの名を Piggy Bank というだけあって、そこには誰も知るブタの仔の成長の早さが、早くお金が貯まりますように、との願いと重なって、それに丸々と可愛く肥るブタさんの身体の中にたくさんのお金が入ることも関連して、貯金箱といえばブタさん、と言われるくらいに定番化した感がある。

事実、ブタの成長は早い。

出産時の体重は8週間後にはもう13倍になっている。これはヒツジやヤギの5倍、ウマやウシの2～3倍に比べて格段の早さであり、仔ブタの成長の早さは誰の目にも一目瞭然であるから、早く

お金が貯まりますように、との願望がブタの姿に投影されたに違いない。

それに、今と違って以前は食物材料の生産地と消費地が近いこともあって、一般の人がブタを、特に仔ブタを目にする機会が多く、親しみを感じやすかったのもその原因と見る。また、品種改良によって生育も性成熟も早くなり、年間を通じて仔ブタを見る機会があることも理由のひとつに挙げられるであろう。

こうして、仔ブタの可愛さとあいまって、欧米ではブタを所有することがそのまま富であり財産であると思われていたから、貯金箱になることはむしろ当然であったかもしれない。

ブタとの関わりがさらに古く深い中国にあっては、ブタへの親しみはさらに深いものがある。十二支の亥は日本ではイノシシだが、中国ではブタを意味している。ちなみにイノシシは中国では野猪と書き、ブタは猪である。だから西遊記の猪八戒は、まさしくブタなのだ。亥年はブタの年、となると親しみはまるでかわってくる。

この All About Swine 誌 No.7 (1995) にも「猪年に豚を語る」として揚珍氏の一文が寄せられている。家庭にとって何とも縁起の良い動物として中国ではブタが愛され、百福を呼ぶとして、太ったブタが門を押し入ってくる絵や、ブタが宝箱を背負っている年画（正月に縁起を祝って室内に貼る絵）、切り紙、刺繍などが民間美術となって代々伝わって来た、と述べている。

ところで、愛されるブタ、を何より実感させられるのは多くのブタ・グッズ、ブタの人形の数々に囲まれた時であろう。

その得難い機会を与えられるのが東京は武蔵野市の吉祥寺、駅の北口から歩いて数分、東急デパートの南の道を西に行き、藤村女子中学高等学校の少し先の左にあるブティック、三村はじめさんのお店だ。店名は3D-238（スリーディメンショナルK.K. 住所；武蔵野市吉祥寺本町2-33-14、電話；0422-21-8848）。店の前にやや大きめのブタの物入れ（背中をあけて出し入れする）があるのですぐわかる。

三村さんのブタのコレクションは半端ではない。20年以上にわたって各国を旅する度に買い集めたものの一部が店に置いてあるが、それでも何百あるか……とにかく凄い。

先に述べた入口のブタの物入れ、その背中の中を開けるといろいろなブタ・グッズが入っている。人形やら箸置きやら何やら。ブタの身体全体が光る電気スタンドがある。入口の扉が閉まらぬようおさえている三角のくさび形の扉のストップもブタさんだ。奥の棚にはいろいろな表情のブ



フライング・ダンボー、じゃない、ダンブー

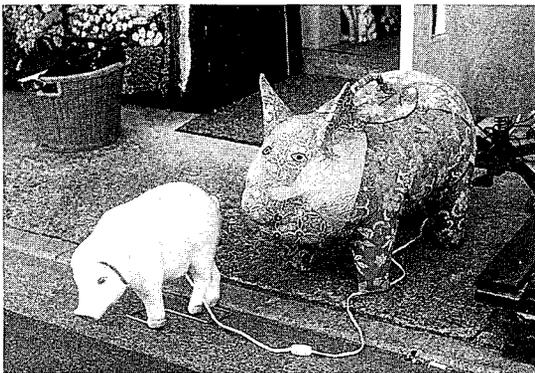
タ人形がずらりと並び、大きな鼻から風が吹き出す扇風機もある。ふと見上げると小象のダンボがそのままブタの姿になって翼を広げて飛んでいるブタさん（ダンブー）が吊り下げられている。羽根の生えたブタさんはこのほかにも2体あってコレクションの多様さがわかる。

その楽しいことといたら思わず頬がゆるんで笑顔になって、次々と飽きずに眺めまわしている自分に気が付く。……三村さん、いつも何も買わないでごめんなさい。私は男ですので……。

これだけ大小さまざまなブタさんがいて（もちろん売り物もありますよ）、お店の、それもブティックの雰囲気は全然損なわれていないところが、やはり三村さんのお店らしい。

陶器の、金属の、ぬいぐるみの、さらに手作りのブタのおはじきまであって、時の経つのを忘れるうちに、ふと気がついたことがある。

大小、各種さまざまなブタさん、この膨大なコレクションの中には、ただブタそのものの姿のものも多いが、それにも劣らず多くて楽しいのが、擬人化したブタさんが多いことだ。楽器を演奏するブタさん、それとは別にブタさんばかりのオーケストラがある。そういえばブタは、音楽を理解



三村さんのブティック入口でお迎え。
隣は電気スタンド



これがフーテンの寅ブタ？

し、時には自分から踊り出す動物のなかではごくごくまれな感覚、感受性の持ち主で、ブタの生育と精神衛生のために穏やかな音楽を聞かせて飼養している所もあったっけ、と思い出す。

それに買い物かごを提げのお母さん、いやおばさんブタ。ベビーベッドの中の赤ちゃんブタをいとおしげに見おろしている若い母親のブタ。このあたりまでは他の動物人形でもありそうな模擬化の姿である。

ところが、入浴中のブタさん、サングラスで葉巻をくゆらせるブタ、さらにビキニでサングラス、手許に西瓜やケーキを置いて日光浴中の女性のブタ、バレリーナ(これが可愛い)のブタさん。かと思うとビールを飲み干す……もちろん肥満体の……ブタ、鏡に向かってお化粧品に余念のない(どうみても中年の)ブタ婦人、他にも手鏡を持った若いブタもいる。

驚いたのは、旅姿にサングラスで旧型のトランクを前に坐っている寅さんみたいなブタ人形である、もちろん服を着て……。“驚いたなァ、寅さんのブタさん、ブタのトラさんなんだ”と説明し

たが、聞いた方は、いったいそれは何だ、ブタなのかトラなのか、としばらくは理解できなかったらしい。欧米の、古い陶製のもので当然日本の寅さん出現の前の作品、にしてもその雰囲気似ていること。

この他に消防夫のブタさん、荷車をブタが曳きその荷台にもブタが乗っているのもある。つまり、人間の生き様の種々相を、ブタが演じていてちっとも違和感を覚えないのである。

いや、その多彩さ、いったいこれは何ゆえなのか。これが他の動物だとしたらどうだろう。

イヌ、ネコ、ウマ、ネズミ、ウサギ……それぞれ何かしら特定のイメージに結びついていはいせぬか。イヌならお巡りさんや探偵、そうシャーロックホームズの姿の犬の置物があったっけ。これがネコとなるとおしゃれ、おしゃまな感じで流し目をくれたりする。ウシとなるとスマートさとはほど遠くなるし、ネズミはちょこまかして小さな世界をイメージする。酒飲みのネズミなんてまず考えつかぬ。

その点比較的擬人化されやすいのはクマとウサギかもしれない。というより、これらはクマのブーさんやピーターラビットの影響かもしれない。彼らの演ずるのは得てして健全なカントリーライフであり、そのお話には悪徳はまず見られず、誰しもが犯すささやかな失敗や教訓の例が多い。サングラスや葉巻、飲酒……それもひっくり返っての姿はまず考えつかない。ましてや鏡に向かってのお化粧品なんて他の動物ではあり得ない、というか想像できない。

こうして見てくると、ブタ以外の動物の擬人化は主として動物の仔、つまり可愛くてちょっと頼りげのない感じ、でなければカエルや昆虫といっ

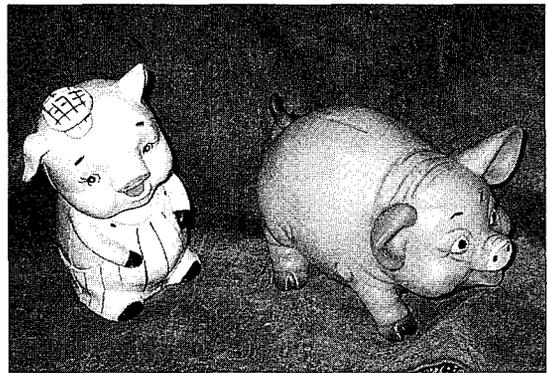
た小動物、つまり子ども向けのものが多いことに気付く。大人の動物をこれまた大人向けにアニメ化したのはデイズニー以来、と言えるかもしれない。その点だらしく寝そべっている大人の姿となると、擬人化するしないにかかわらず、これはやっぱりブタさんの出番でなくてはならず、事実そのような姿のブタ・グッズが多いのである。

ここでどうしても考えてしまうのは、この飽食して、だらしくまたは気持ちよさそうに寝そべり、時には仰向けに寝ている姿、これは人間の、いや人類始まって以来の最も単純にして素朴な願望そのものではないか、ということである。

今から40年前、一流といわれる財閥系企業の社員に趣味は、そして今一番したいことは、と尋ねたところ、何人かが食うことと寝ること、と答えたのを思い出す。今と違って、とにかく食うためには働かなくてはならぬ、職場で上司、先輩、取引先にもまれ、転職もままならず、ストレスもたままる。当時の生活感覚として最も身近な願望は“食っちゃ寝”だったのだ。それを現実に現しているのがブタさんの生態だったのだ。建て前こそ刻苦勉励、勤儉努力……何かこう本質的に貧しさがつきまとった頃の、表向き口に出せなかった人々の夢の、願望の具現者、それが愛すべきブタさんの種々相となってこのような多くのブタ・グッズが生まれてくる。

いやあ少し理屈に走りすぎたようだ。元に戻ろう。今は三村さんのブティックに立ち尽くしているのだ。

大きい小さいの、目の前にずらり並ぶブタさん達の表情は、やさしさ、楽しさ、慈愛にみちた、いたずらっぽい、人生こんなもの、健気さまるだし、何かに集中して言うことなしの極楽



これ、貯金箱

顔、かと思うと何とも凜々しいのまで、人間の、そして人生の種々相を残らず見せてくれる。これはどうしたことなのか、それだけ良い点も悪い点も含めて人間サマの生き様を投影して何ら違和感がないのは、それだけ人類に共通点が多いということではないか。

やはり、ブタは愛される、愛されている動物だった、と思わざるを得ない。ブタを悪しざまに言う人は、無意識のうちに、ブタの生態の中のおのれの、人類の姿を見だし、その中の嫌な、悲しいまでに人間に似た部分を感じ、受けとめざるを得ぬ、屈折した感情に動かされているのではないか。

言うまでもないことだが、愛と憎悪は表と裏の関係にある。愛の反対は無関心！ 知りたくもなければ思い出したくもない相手。となると、ブタをあえて悪く言わねばならぬのは、それだけ強く意識せざるを得ぬ存在ゆえ、に違いない。

わたしは、愛されるブタさん達の多くの視線を背に受けて、三村さんのブティックを後にした。

多くのブタさん人形に囲まれた1時間近くのお場所は、私にさらに多くの問題を投げかけ、考えさせられる学びの場、でもあったのである。